「広西の会戦」はどう記憶されたか
——記念碑と遺跡を中心に——

王　　暁葵

はじめに

「広西の会戦」は、1939年～1944年の間に日本軍が中国広西省において2度にわたり起こした大規模な戦争を指す。1939年10月、日本軍はベトナムからの仏印援蒋ルートを遮断すべく行動を開始、11月15日に第二十一軍は海軍と共に第五師団、台湾混成旅団を率いて欽州湾に上陸し、欽州と防城を占領後、24日に南寧を攻略した。蒋介石が率いる国民政府は、国際支援物資の補給路を確保するため、約10師団の兵力を動員し、日本軍と全面対戦した。日中両軍は、その後12月中旬までの間、広西の賓陽、来賓、柳州で次々に激戦を繰り広げた。日本軍の歩兵第二十一、第四十一聯隊は、優勢にあった中国軍の包囲を受け、崑崙関守備隊は全滅、歩兵第二十一旅団長中村少将は戦死した。戦況は一時中国側が優勢となったが、その後、日本軍が急遽第十八師団、近衛混成旅団、第五師団、台湾混成師団を参戦させ、1940年1月に日本軍が攻勢に転じ、中国軍は苦戦した末、南寧、崑崙関などを放棄し撤退した。交戦は2月中旬に終了した[1]。

1944年～1945年、日本軍は、華北と華南を結ぶ京漢鉄道を確保し、南方資源地帯と日本本土を陸上交通路で結び、また米空軍のB-29飛行場群の撃破・占領、及び国民政府軍の殲滅と戦意を喪失させることを目的にし、総兵力40万、作戦距離2400kmに及ぶ大規模な攻勢作戦を行った。いわゆる「一号作戦」である。その重要な軍事目標は、華南の桂林、柳州などの広西の重要都市を占領、二大航空基地を攻略するということである。日中両軍は桂林などで激戦し、双方とも多くの死傷者を出した。戦闘は1945年春まで及んだ。結局日本軍は占領の目的を基本的に達成はしたが、太平洋戦争全体の局面を変えることはできず、尚且つ、中国側の抵抗により、「支那派遣軍自体の消耗も決して僅少でなく」[2]という結果となった。

上述のように、1939年から1944年まで、広西は、日中戦争の重要な戦場として、双方とも多くの兵力を投入し、激しい戦闘が展開された。中国

側は軍人と民間人を含めて、多くの犠牲者が出た。そうした死者のために、国民政府、所属部隊、地域社会などは、慰霊碑、忠魂碑を建立し、慰霊祭を行った。本文は、広西の会戦に関する記念物の整理と分析を行う。

1．戦争記念碑と被害遺跡

広西の日中戦争関係の記念碑について、全体数は未だ統計されていないが、2005年11月に出版された『抗戦遺踪――広西抗戦文化遺産図集』(李建平編纂、広西人民出版社）では、抗日戦争関連の記念物、遺跡及び関連出版物を「抗戦文化遺産」とし、それを以下のように分類している。1．指揮地遺跡（9)*、2．戦場遺跡（8)、3．日本軍侵略及び中国人民被害遺跡（9)、4．抗日英雄活動遺跡及び遭難烈士記念碑、塔、墓（21)、5．抗戦機関活動遺跡（13)、6．名人故居と文化遺跡（15)、7．国際援華抗戦、反戦機関と人士活動遺跡（7)、8．抗戦標語、石刻（7)、印刷物文化遺産（抗戦新聞、抗戦雑誌、抗戦書籍、抗戦マンガと木版絵)。本論は上述の2、3、4、7を基礎資料とし、地誌を参考にして、広西の会戦関係の記念碑と遺跡を分析する。

*（　）中の数字は筆者が統計した遺跡の数である。

表1　広西戦没者記念碑一覧表

	名称	建造年代	揮毫者	場所	高さ（m）	関連事項
1	抗日烈士黄阿全墓 (「二七五師一零四一団一営二連列兵　黄烈士阿全之墓　広西省西林県平桑村人」) ※	1937（？）		北海冠頭嶺南渦神農廟附近		1937年9月27日北海要塞冠頭嶺に日本軍艦の砲撃を受け戦死。
2	周元将軍故居と記念塔 (「陸軍中将第一七三師副師長周元抗日陣亡記念塔」、「成仁取義」、「痛失干城」)	(桂林の記念塔) 1938-1939 (？) 1989(修復)	李宗仁 白崇禧	戦死地の安徽蚌埠県に「周元将軍暨守蚌将士抗日殉国記念碑」がある。(1988年建立) 広西宁明県明江鎮洞廟	(桂林の記念塔) 5	故郷の宁明県明江鎮に当時忠烈祠と記念碑が建てられたが、「文革」の際に取り壊された。現在、故居が保存されている。桂林に記念塔があり、後に取り壊された。1989年に修復、桂林市文化財と指定された。 隣に「陸軍中将周元副師長抗日殉国記」碑がある。

				村（故居） 桂林市瓦窯 桂林棉紡工場内 （記念塔）		
3	空軍英雄何倡墓 （「為国犠牲」、「空軍第八隊何副隊長倡号徳璋之墓」）	1938年5月		桂林市大河郷潘家村東山場		国民党空軍第三大隊八中隊上尉副隊長。1938年3月25日山東省臨沂に対日空戦中戦死。1952年に人民政府は革命烈士と認定した。
4	空軍英雄莫休墓 （「為国犠牲」、「空軍中尉分隊長莫休之墓」両側「鵬飛未遂凌云志，盆伏終有抗日心」）	1938年5月 1986年（修復）	周至柔	陽朔県陽朔公園内玉屏山麓		1938年春の徐州会戦参加、3月25日帰郷空戦中に戦死。1986年人民政府により革命烈士に認定、墓を修復し文物財と指定した。墓前に元中央航空委員会主任周至柔が揮毫した『空軍第八隊中尉分隊長莫君休墓志銘』、墓旁に中国人民政治協商会議陽朔委員会の『莫休抗日空戦陣亡紀事』がある。
5	南丹抗戦陣亡将士暨死難同胞記念碑 （「大中華民国三七年七月七日六寨各界民衆敬立」）	1938年7月7日		南丹県六寨鎮中山公園山北		中山公園に近い山の上に「好男児当報国仇」碑があり、立碑者は陳聯方。この碑は毀損され、残りの四つの碑石は六寨鎮政府の庭内にある。
6	黄鶯烈士記念碑 （「碧血忠魂」）	1939（？）	蔣介石	宜州市龍江公園（現宜州市飼料公司）		墓は壊され、碑は市文物管理所に保管されている。
7	資源県抗戦陣亡将士暨死難同胞記念碑 （「精神不死」、「壮烈先声」、「為国捐軀」）	1939	王潜 呉耀 蔣山	資源県中峰育才中学校の隣	1.6	文革中倒され、1988年修復。
8	広西全辺対汎督弁署汎警隊抗戦陣亡官兵烈士墓	1940	王遜志	寧明県愛店鎮「金牛潭」地域内		俗称「白馬墳」、墓は破損激しく、主碑がすでに倒れた。
9	上林大豊鎮抗日忠勇陣亡将士義塚碑 （「万古流芳」）	1941（？）		上林県大豊鎮		
10	上林巷賢鎮抗日記念碑（「精	1941		上林巷賢鎮		碑の隣に抗日記念亭がある。

	神不死」「抗日陣亡諸先烈将士之墓」)					500人ぐらいの戦死者を埋葬。
11	鎮毅将軍墓	1941		桂林市大河郷莫家村(東)黄泥頭山場		国民党第84軍173師長、1940年5月9日に鄂北随(県)棗(陽)防衛戦で戦死、人民政府により革命烈士と認定。
12	秦霖将軍記念墓(「抗日陣亡少将追贈中将秦故旅長諱霖沛然記念墓」「精神不死」)	不明		桂林市西南黒山苗圃内	3.65	衣冠塚。1937年10月23日に淞滬会戦に戦死。
13	陸軍四十六軍第一七五師鎮南抗日戦役陣亡将士公墓	1941	夏威 馮瑣 巣威	盤山県太平鎮鎮南村泗峡拗道路傍		1982年に県重要文化財に指定。 (「泗峡拗抗日烈士墓」ともいう)
14	桂南戦役陣亡将士記念亭	1941	李宗仁 白崇禧 張発奎	南寧市内植物路広西第一保育院内(旧中山公園)		旧名「第16集団軍陣亡将士記念亭」、中華人民共和国成立後改名。現南寧市指定文化財。
15	陸軍第一百八十八師抗戦陣亡将士記念塔	1941	魏鎮	扶綏県山圩鎮長興飯店裏		師長魏鎮の命令で建てられた。「陸軍第一百八十八師抗戦陣亡将士記念塔記」の碑文あり。
16	崑崙関陸軍第五軍崑崙関陣亡將士墓苑	1940-1944	蔣介石 李宗仁 白崇禧 杜聿明 李済深 等15名	南寧市邕寧区崑崙鎮崑崙山東		1994年広西重要文化財に認定。墓苑内に記念碑、亭、墓、牌坊など、日本軍少将旅団長中村正雄の墓もある。新しい記念館は建設中(2008年11月現在)。
17	三将軍墓と記念塔	1945 1982(修復)		桂林七星山普陀峰博望坡		桂林防衛戦を指揮する国民政府陸軍131師少将師長閻維雍、桂林防守司令部中将参謀長陳済桓、陸軍第31軍少将参謀長呂煦棠の墓。1945年に国民政府は桂林七星山普陀峰博望坡に三将軍墓と「殉職記念塔」を建てた。1982年桂林市人民政府は三将軍墓を修復、1984年に桂林市文化財と認定、1984年11月3日、人民政府により三人を革命烈士と認定。
18	八百壮士墓	1945年10月		桂林市七星公園普陀山		1944年10月29日～11月初、国民政府陸軍第31軍131師

		1982年（修復）		博望坪		391団は日本軍と激戦の末、普陀山七星岩内の中に撤退、日本軍に毒ガスで攻撃を加えられた。1945年10月、桂林市政府は823の遺骨を発見し、三将軍と一緒に普陀山博望坪で埋葬、記忠亭を建てた。1982年に桂林市人民政府は八百壮士墓を修復、1984年に桂林市文化財と認定。
19	趙志光烈士墓（「勇士当年殲日寇，英魂永古捍山河」）	1945（？）		陽朔県興坪鎮鄧子山東面	1.2	
20	抗日烈士記念碑	1947	蔣介石 張発奎 羅卓英 曾伝仁	欽州市油路大坡嶺（黄其洞村西）	碑　7.5 亭　4.5	1966年文化大革命の際、取り壊された。
21	義敢村抗日陣亡烈士記念碑（「壮節長昭」、「气壮河山」）	1948	黄旭初 張威遇	荔浦県大塘鎮義敢村	3	地元では「六月六抗日記念塔」と称される。「六月六」は塔の所在地の地名。 1985年７月　県重要文化財に指定。黄旭初（国民党広西省主席）張威遇（国民党広西省政府民政庁長）。
22	朱世祺烈士墓	1948（？）		融県東嶺郷（今属融安県潭頭郷）		融県抗日挺進隊一分隊隊長、1948年５月羅城県三防区（今属融水県）で戦死。
23	防城県那良抗日武装起義記念碑	1985		防城県那良鎮		
24	桂東南抗日武装起義烈士記念碑	1986		興業県英陽郷木根圩		中国共産党興業県英陽郷委員会、同人民政府が建立。
25	陽朔聯隊敵後抗戦記念碑	1990	黄嘉	陽朔県陽朔公園内	5	桂林史愛国主義伝統教育基地。
26	広西学生軍抗日烈士記念碑	1991		広西南宁市青秀山公園内	20	桂林から移転。
27	桂東南抗日武装起義烈士記念塔	1997		玉林市東郊朱巷口公園内	38	中国共産党玉林委員会、同地区行署が建立。 広西壮族自治区愛国主義教育基地、玉林市精神文明建設教育基地、国防教育基地
28	抗日将領夏国璋烈士	2006		容県革命烈士陵園内		1937年11月戦死、1987年４月17日、人民政府により革命烈士と認定。

29	騰翔陣亡将士墓	2007		南寧市武鳴県双橋鎮騰翔村		

※ (　　) 中は碑文、碑銘

表2　被害遺跡一覧表

	名称	事件発生時期	関連事項
1	欽州万人墳	1940	欽州貴台郷上那冷村　死者108名。
2	南寧市千人墳	1939–1940	南寧市江南区沙井鎮楽賢村黄瑋嶺嶺頭坡。 1996年8月南寧市重点文化財となる。
3	日軍飛機空爆罪行遺跡	1940	欽州市盤山県盤城鎮、盤山中学内。 1940年日本軍空爆によってできた穴の隣に「九一八国耻記念碑」がある。盤山中学は石で弾坑辺縁を囲むフェンスを作り、「愛国主義教育基地」の看板を立てる。
4	馬山県敢細岩惨案遺跡	1944	馬山県城南上龍郷上龍村塘頭屯　死者1840名、失踪186名。1982年に遺跡として認定。
5	融安県鶏仔岩洞惨案遺跡	1944	融安県城南上龍郷上龍村塘頭屯。 死者24人（子供13人)。 1984年12月県重要文化財となる。 「鶏仔岩惨案」碑文があり、事件の詳細を紹介。
6	桂林柘木王家村黄泥岩（白骨洞）惨案遺跡	1944	柘木郷王家村。 死者137人、発見された時、すでに白骨化されたため、1962年に地元の人はこの洞を「白骨洞」と改名した。
7	桂林廟嶺郷馬埠江村燕岩（白骨岩）惨案遺跡	1944	桂林市廟嶺郷馬埠江村、毒ガスで死亡した村民111人。 1995年修復。

表1と表2から、広西の会戦に関する記念物についての特徴を見てみよう。

第一に、記念碑の建造年代は1937年から1949年までの間と、1980年代以後とに分かれている。つまり、日中戦争から中華人民共和国成立までの期間と、文化大革命の終りから改革解放以後の期間に、記念物が立てられている。一方、1950年代から1980年代の間は、記念碑が作られていないのみならず、放置、毀損、破壊などが行われた。

この原因は以下のように考えられる。戦中と戦後の1930–1940年代に作られた記念碑は、殆どNo. 3、No. 4、No. 7、No. 10の「為国犠牲」、「精神不死」、「抗日陣亡」といった碑銘に現れているように、一種の国民団結、国土防衛の抗日ナショナリズムの表象である。これには、戦死者を顕彰、慰霊することによって、民衆の抗日意識を高め、国への忠誠に繋げようという目

的がある。加えて、元々存在していた共産党と国民党の対立という「階級闘争」より、日本と中国の「民族対決」がより重要な課題となっている。

しかし、1949年中華人民共和国の成立以後、中国共産党政権は反国民党という政治的イデオロギーに基づき、「民族解放」より「階級闘争」の論理を優先させる。国民党政府時代に「抗日の英雄」として顕彰された一部の軍人は、No. 2、No. 6、No. 7、No. 17、No. 18などのように、彼らに関連した記念物が放置・毀損されたり、揮毫が削られたりした。このように、日中戦争の記憶の一部の抹消作業が行われた。

ところで、毀損された数多くの記念碑は、1980年代以後、修復、再建されたものが多い。それは、改革開放路線によって、共産党と台湾国民党との関係が緩和され、「中華民族」というスローガンで団結するという動きに転じたからである。中国共産党政府は、国民党の日中戦争時代の功績を再評価し、中国の統一に繋げようという政治的目的で、国民党政府時代の記念物を修復することにした。一方で、1980年代以降、日中関係においては、靖国神社参拝問題、教科書問題などの歴史認識の対立が顕在化した。中国政府は、こういった歴史的背景の下で、新たな日中関係における問題に対応するため、日中戦争に関連する記念物の保存、修復、整備を推進したといえる。

その歴史的背景について、黒龍江省ハルビンにある「侵華日軍731部隊罪証陳列館」前館長韓暁氏は、次のように顧みた[3)]。1982年、日本作家の森村誠一がハルビンの旧日本軍731部隊の実験遺跡を訪問した際、その遺跡の大半がすでに取り壊され、地下実験室だけが残っていた。この状況を地元の文化部門が上層部に報告したところ、1982年10月、中国共産党中央書記局書記、宣伝部長の鄧力群は、「日本軍の中国侵略の遺跡を保存するよう」と指示した。また共産党イデオロギーの最高責任者の胡喬木は、「こうした遺跡を民衆、特に青少年教育の場として、保護すべき」と述べた。さらに、当時の最高権力者鄧小平氏は、「岸信介は満洲建国之碑を立てた、……我々は日本侵略之碑を建てなければならない。これで人民を教育し、子孫を教育する」という談話を発表した。それによって、中国文化部は文物字［82］1289号通達『做好保護日本侵華罪行遺跡工作的通知』(『日本侵略暴行遺跡を保護することに関する通知』) を公布し、日中戦争関係の記念物や遺跡の修復、建設を推し進めた。以下は、重要な記念館の建設と関連事項の一覧である。

表3

1982年6月	日本の教科書改訂問題。
1983年12月	中国共産党宣伝部門責任者の胡喬木は盧溝橋視察、記念館を建設するよう指示。
1985年8月15日	中曽根康弘首相は靖国神社公式参拝。
1985年8月15日	侵略日軍南京大虐殺遭難同胞記念館開館（南京)。 侵略日軍第七三一細菌部隊罪証陳列館開館（ハルビン)。
1987年7月7日	中国人民抗日戦争記念館開館（北京)。
1991年9月18日	九一八事件陳列館→九一八歴史博物館開館（瀋陽)。

表3の1985年前後の日中関係における歴史問題の重要な出来事と照らし合わせてみると分るように、広西の戦争記念物の再建、修復作業は、日中関係の変化と深く関係している。中央政府の対日本政策の一環として、また、地方レベルの歴史表象として再構築されているといえよう。

2．死の諸相

正規軍の戦死

碑文をみると、戦死者は国民政府の正規軍が多数を占めている。正規軍の記念碑は、所属部隊に建てられたものが多く、碑銘や碑文なども大抵長官が揮毫するものである。碑文の内容は、戦歴の記述や英霊を顕彰するものが殆どである。No.15の「陸軍第一百八十八師抗戦陣亡将士記念塔」を例としてあげる。

この記念塔は188師の師長魏鎮の命令で建てられ、塔基に刻まれた碑文は魏鎮の揮毫で「陸軍一八八師抗戦陣亡将士記念塔記」がある。碑文はその部隊の1937年「盧溝橋事変（七七事変)」以降の抗戦経歴を記し、戦死者を哀悼し、建塔の経緯を述べている。

碑文：(一部略)

溯自七七事変以還，抗戦軍興，挙国共憤。本師奉命参加皖鄂桂南諸戦役，歴時三載，大小数百戦，輾転数千里，我将士用命迭挫敵鋒。——二十八年，寇敵乗虚侵入桂南，陳兵賓武之野。師受命馳援，滞敵于崑崙関西南山岳地帯，卒挫其北犯之謀。旋復転戦于吳村唐報山圩崩橋棉羊駄芦弄農各地，口口一役，兵力不満七営，包囲敵第五師団之精鋭于守界渠透嶺呑汪風間，肉搏二昼夜，鮮血成渠，敵尸遍野，開桂南

抗戦以来之新記録。——抗戦迄今，陣亡官兵不下二千数百人。鎮忝長師干，英霊之未妥，寝饋難安。謹于龍州公園及山圩建立記念塔与公墓，以慰忠魂而彰功烈。

訳：蘆溝橋事変以来、全国に抗戦の機運が高まり、本師は命令を受け、皖鄂桂南諸戦役に参加、三年間、大小数百戦を経て、数千里に転戦し、敵の気焔を抑えることができた。——1939年、日寇は桂南に侵入し、賓武之野に軍勢を展開した。本師は命を受け援護し、崑崙関西南の山岳地帯で敵を阻止、北への進入の企てを挫折させた。その後、呉村・唐報・山圩・崩橋・棉羊・駄芦・弄農などに転戦し、口口の役において、我が兵力は七営に足らず、敵第五師団の精鋭を守界渠・透嶺・呑汪風の間に包囲し、二昼夜の激戦を経て、大勝利を収めた。殲滅した敵の数は、桂南抗戦以来の新記録を達成した。——抗戦以来、わが師の戦死者は二千数百人を超え、その英霊を安らかにするため、龍州公園と山圩に記念塔と与公墓を建て、忠魂を慰め、烈士を顕彰する。

また、次に挙げる空軍の戦死者三人のために、特別に個々の記念碑が建てられている。No. 3、No. 4、No. 6で顕彰されている何信、莫休、黄鶩の三人は、それぞれ山東、徐州、南昌で戦死したが、出身が広西のため、遺骸がはるばる故郷まで運ばれ埋葬された。戦時中この待遇を受けられるのは、決して一般的ではない。何信は空軍上尉中隊副隊長、莫休は中尉分隊長でそもそも平兵士ではないが、職位はそれほど高くない。おそらく当時中国で「空軍」はまだ新しく、貴重な存在として特別に扱われていたと考えられる。

莫休の墓は1938年5月、彼が戦死した直後に立てられたが、1986年人民政府はこれをさらに修繕し、文化財と認定した。また、中国人民政治協商会議陽朔委員会が『莫休抗日空戦陣亡記事』碑を立て、彼の履歴と戦死の状況を詳細に紹介している。

碑文：

莫休，陽朔県福利鎮姑婆寨人。一九三四年広西航空学校飛行科卒業，歴任国民党空軍少尉飛行員、中尉分隊長。一九三七年抗日戦争爆発后，曾率所属戦機在蘭州、西安、襄陽、信陽等地担任空防任務，与戦友們共同保衛国土，抗擊日寇侵襲。一九三八年初，中日徐州会戦，

莫休曾与戦友飛臨前線，重創敵寇，受到第五戦区司令長官李宗仁的賛揚。

一九三八年三月二十五日，徐州会戦愈烈，莫休与戦友們駕駛戦闘機十四架，再次支援徐州前線，掃蕩滕県、臨城之敵陣地，又一次予敵以沉重打擊。任務完成后，返航至帰德附近上空，与敵戦闘機十八架遭遇，旋即展開激烈空戦。莫休与戦友們奮身迎擊，協力拼拇，共同擊落、殺傷敵機六架后，不幸座機多処中弾，油箱着火，莫休乃跳傘降落。日軍飛賊不顧国際公法，竟対我跳傘人員開銃射擊，莫休傘下中弾身亡。

莫休壮烈犠牲時，年僅二十七歳，他為国捐躯，可歌可泣，特勒石紀其事略，以垂千古。(下線筆者)

中国人民政治協商会議陽朔県委員会

一九八六年十二月十五日

彼の死因について、「操縦する戦闘機が被弾しパラシュートで脱出する際、日本軍機が国際法に違反して、彼を射殺した」(碑文の下線部の訳)と説明している。

No. 6の黄鶯の死については、地誌によれば、彼が南昌でソ連の義勇軍空軍と協同で戦闘中、ソ連軍機が日本軍機の攻撃を受けるかと見るや、救援しようとして被弾し、戦死した[4]という。彼の墓碑はのちに毀損された。その原因は恐らく彼の碑に蒋介石の揮毫「碧血忠魂」があったためである。1949年以降、蒋介石は共産党政権により、「人民の敵」というレッテルを貼られ、彼に関連するものの多くは毀損の対象となった。

正規軍の戦死の中には、捕虜になるのを避けるため自殺した軍人と毒ガスで中毒死した事例があったことも、碑文から分る。

No. 16の、No. 17の桂林防衛戦に関する記念物の紹介は、次のような内容である。

碑文：

1944年11月上旬，日軍進犯桂林，国民党第四戦区組織桂林保衛戦。31軍131師師長閻維雍率部与敵奮戦，終因寡不敵衆，自殺殉国。履行了与桂林共存亡的誓言。城防司令部参謀長陳済恒和31軍参謀長呂旃蒙突囲途中遭遇阻擊，呂旃蒙陣亡，陳済恒身負重傷，挙銃殉国。131師391団官兵退守七星岩堅持抵抗，日軍向洞内施放毒气，800余名官兵壮烈犠牲。

光復後，三将軍及八百壮士遺体先后移葬于此。為表彰其愛国精神，人民政府追認三将軍為革命烈士。殉職記念塔于1987年重建。

桂林文物管理委員会

訳：1944年11月上旬、日本軍が桂林に侵犯した。国民党第四戦区は桂林防衛戦を行い、31軍131師長閻維雍は部下を率いて奮戦したが、衆寡敵せず、存亡は桂林と共にするという誓いを守り、自殺し国に殉じた。城防司令部参謀長陳済桓と31軍参謀長呂旃蒙は包囲を突破時に攻撃を受け、呂旃蒙は戦死、陳済恒は重傷を負い自らの手で国に殉じた。131師391団の将士は七星岩に撤退し抵抗し続けたが、日本軍が洞内に毒ガスを施し、800余の将士は壮烈に戦死した。

桂林回復後、三将軍と八百壮士の遺体はここで埋葬された。彼らの愛国精神を顕彰するため、人民政府三将軍を革命烈士と追認して、殉職記念塔は1987年に再建された。

桂林文物管理委員会

つまり、閻維雍と陳済桓は桂林城を日本軍に攻略されたとき、自殺したという。日本軍の毒ガスにより戦死した将士は合計823名となり、1945年10月、桂林市政府は七星岩の洞内に823の遺骨を発見した。

地方武装や民団の死

正規軍以外に、地方の警察部隊、民団組織の戦死者もかなり多い。No. 8、No. 9、No. 10、No. 21等は、地方武装や、村自衛組織のものである。No. 8広西全辺対汎督弁署汎警隊抗戦陣亡官兵烈士墓の碑文から、戦闘の状況がうかがえる。

碑文：

前歳敵侵桂南，去秋龍区再陥。遜老側身辺務，軫念時限，夙夜焦思，時籌対策。関于両明、思楽一帯辺境，地当要冲，苦无防軍駐守，乃与龍区李専員新俊商派李君国安任汎警第二大隊長職，率隊弛往扼守，以遏制敵寇，而為治安。八月初，倭寇乗欧局転変，法敗降德，即集合寇兵二万余衆，由両明、龍、凭四県，分道深入越南，以図掠据。是時李大隊部扼守愛店一線，首当其鋒。雖抑隊敵驟，浴血苦戦者凡両閲月，冲殺于長橋、峙浪、愛店等処，尤以八月九日之峙浪、九月二十一日之愛店両役最為悲壮，均能前赴后継，踊躍效命。如黄班長等全班之悉数

成仁，覃大隊副等之奔冲負傷，卒能牽制敵寇，使其不能安然入越，其臨難不苟，亦足多矣！当茲大敵出没辺防益急之際，緬懐是役殉国士兵，其忠勇抗敵精神実足振奮同儕，発揚国光，遜為発起募資，建墳場竪豊碑于愛店山陽，以宏記念，而資観感。凡我辺区軍民，共睹英風凜凜而益思奮勉，同磋国仇未報，而倍増策励，是為記。

烈士芳名：(中略)

中華民国三十九年九月二十四日

王遜志　敬立

その大意は：1940年8月、日本軍は南寧、龍州を占領した後、欧州でフランスが戦争でドイツに降伏したのを機に、南寧、龍州にいた約二万名の日本軍は、中国とベトナム国境の明江、寧明、凭祥、龍州四県各要隘からベトナムへ進出を図った。当時、愛店周辺の警備担当だった広西全辺対汎督弁署汎警大隊二百人余は命令を受け阻撃を開始。二ヶ月間の苦戦を経て、黄班長をはじめ全員が戦死するなど夥しい犠牲を払いながらも、敵を牽制することに成功した。

地誌などの文献資料によると、この戦闘中、汎警隊側の戦死者は24名。その年9月、広西全辺対汎督弁王遜志は募金を呼びかけ、愛店市民やベトナム華僑の寄付により、その墓苑と石碑を建設した。

民衆の死

戦禍に巻き込まれた一般民衆は、常に虐殺の対象となったことは、特に被害遺跡の記述や紹介から読み取れる。表2のNo. 2の南寧市千人墳の碑文は以下のである。

碑文：

一九三九年至一九四〇年南寧淪陥時，日寇在沙井金鶏設拠点，常四出掃蕩，焼殺搶掠，周囲群衆和逃難者深受其害。其中一九四〇年三月六日一次惨遭銃殺的民衆即達三十余人。南寧光復后，沙井郷村民歴経半載，陸続発現多出遺骨。后由郷人捐資将遺骨收殮合葬于此処地。并将淪陥前后死難義胞中知其姓名的八十五人刻于墓碑中。因遺骨難計其数，姓名无从査究，故称「千人墳」。

此墓因年久失修，現由人民政府拔款，重新修整。昭示后人，勿忘国耻。

南寧市文物管理委員会弁公室
一九九六年二月一日

訳：一九三九年から一九四〇年までの南寧陥落の間、日寇は沙井金鶏に拠点を設け、常に周囲を掃蕩した。周囲の住民と難民の被害は極めて深刻である。一九四〇年三月六日、一回で銃殺された民衆は三十数人に上る。南寧を回復した後、沙井郷村民は半年を掛けて、多くの遺骨を掘り出し、募金を集めここに埋葬した。そして占領期間中殺害され、身元が判明した八十五人の同胞の氏名を墓碑に刻んだ。遺骨の多数は身元が確認できないため、「千人墳」と呼ぶ。

この墓は年月がたち破損が激しいため、人民政府が出資して修復した。これにより、後人に国恥を忘れないように戒める。

南寧市文物管理委員会事務局
一九九六年二月一日

表2のNo. 5融安県鶏仔岩洞惨案遺跡、No. 6桂林柘木王家村黄泥岩（白骨洞）惨案遺跡、No. 7桂林廟嶺郷馬埠江村燕岩（白骨岩）惨案遺跡などは、無抵抗の村民が殺害された現場として保存されている。

No. 5については、事実は次のようである。

1944年冬、日本軍は融県を占領、太平村周囲の10軒の家24人が鶏仔岩洞に身を隠したとき、日本軍に見付かった。日本軍はわらと唐辛子を混ぜ、燃やして風車で煙を洞内に送り込み、全員を殺害した。この中には子供13人が含まれている。

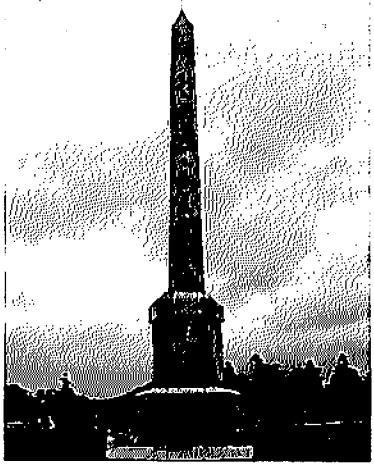
No. 7桂林廟嶺郷馬埠江村燕岩（白骨岩）惨案遺跡については、1944年11月7日、日本軍は燕岩の中に避難民を発見、11日に洞の外に村民たちが置いた衣類、家具、谷米、柴などを集め、干し唐辛子を混ぜて燃やし、7日間にわたって煙を洞内に送り込んだ。結局村民111人を煙で死亡させた。その内、9家族は一家全員が死亡した。洞内で白骨が発見され、地元の人々は死者をまつるため、燕岩を「白骨岩」と改称した。

3．崑崙関戦役

広西の戦争遺跡の中、規模が最大なのは、1939年崑崙関の戦役の記念

物である。崑崙関戦役については、冒頭で触れた。すなわち、1939年12月中旬、中国軍は、日本軍に占領された南寧を奪回するため、12万人の精鋭部隊を高峰隘と和崑崙関以北に集中させ、崑崙関を主要目標にし、陸軍、空軍、砲軍が協同して、全力攻撃を行った。崑崙関の守備に当たる中村正雄少将が率いた第21旅団は堅固の堡塁を築き、必死に抵抗したが、中国軍の攻撃によってほぼ全滅され、中村少将は戦死し、崑崙関は中国軍の手に入った。後に日本軍が増援部隊を強化したため、中国軍は最終的に撤退したが、一旅団の日本軍を全滅させるという戦果は中国側にとっては、極めて大きなものであった。したがって、崑崙関の勝利は、「崑崙関大捷」と呼ばれ、「中国南方戦場の一大勝利は、中国の軍隊に、抗戦の力があり、しかもその力が増強しつつあることの証明でもある」[5]と評価された。

戦役直後、国民政府は攻撃に当たる主要部隊、陸軍第五軍の戦死者のため、壮大なる記念墓苑を建設した。この墓苑は南寧市東北59kmの邕寧区崑崙鎮崑崙山東に位置し、入り口に三門四柱の石牌坊があり、頂上に抗日陣亡将士公墓、記念塔、碑亭が建てられる。牌坊から山頂まで331階の石道が作られた。蔣介石、李宗仁、李済深、白崇禧、杜聿明など国民党の要人の揮毫がある。前線の指揮者の杜聿明が記念碑文を書いた。



陸軍第五軍崑崙関戦役陣亡將士紀念塔（筆者撮影）

陸軍第五軍崑崙関戦役陣亡將士紀念亭碑文：

崑崙関，古戦場也。雄峙于邕賓路，崗峦環抱，中通隘道，為南寧東北之門戸。地扼勢険，易守難攻，且為古今攻守南寧所必争之地。昔宋狄武襄，雖于上元夜乗濃智高不備，一挙而攻略之。然考其戦績，則鼓行而前，死亡枕藉。犹頼狄武襄神勇堅定，所部将士用命，始奏奇捷，固未若世俗所伝成功之易也。中華民国二十八年冬，倭寇以第五師団由北海登陸。侵襲桂南。連陷欽防、南寧，其勢甚鋭。時聿明長陸軍第五軍。因敵犯長沙，先以増援入湘。未至而敵潰、遂戍衡岳。洎衡命馳援，兼程倍進。我前鋒二〇〇師六〇〇団，得予南寧近郊戦闘，血戦三日，殺傷過当，団長邵一之壮烈殉職。嗣以主力尚未集中，軍奉命于賓陽，遷江間，拒敵北犯，而敵則進踞崑崙関焉。迨我軍転守為攻，敵已于崑崙関要隘暨外囲据点扼険布防。其堅固堡塁，側防機関，乃星羅棋布于崇山峻嶺之間，宜其固若金湯。然竟為我軍所破，誠非倭寇予料所及。聿明于攻克崑崙関后，巡行戦場，低徊遺跡，始悉敵凭藉地利，配備火力之狡悍与工巧，而嘆攻堅克険之匪易。惟此残堞剰塁，僅存于荒烟蔓草之中，供人凭吊，因我忠勇将士浴血争闘之所收穫。衡諸狄武襄時，其攻略之難易，何啻倍蓰？而我克復崑崙関，適値除夕令節，又若与前史后先輝映矣。総計是役我軍攻略部署，初用包囲殲滅，継用正面突破，最后集中各種威力，逐次攻略。自是年十二月十八日開始，初以新二十二師及軍補充一、二両団迂回敵后，以荣一師、二〇〇師由崑崙関正面包囲攻撃，継以歩、炮、戦車協同攻撃，曾両次突進崑崙関隘口，未穫成果。嗣以歩兵頼戦車密切援助，炮兵掩護突撃，経迭次猛攻，連克重要碉塁十余，敵犹困据崑崙関北方数据点。死守待援。最后調集一五九師、新二十二師及軍補充一、二両団，于正面継続逐次攻略，訖十二月三十一日，卒于敵陸続増援中，一鼓而下難関。俾頑敵聚殲，敵酋中村正雄授首，卤穫戦利品无算。并乗勝進出九塘以南地区，計共殲敵第五師団一旅団以上，復撃潰増援敵二十師団。回溯克敵制勝。悉秉承最高統帥蔣之予定方略，及桂林行営主任白公崇禧、三十八集団軍総司令徐公庭瑶之指揮若定。聿明之身其間，幸不辱命，実頼我忠勇将士，不屈不撓，奮励无前之士气。殫精竭力，僅而克済。当其猛烈争奪之際，敵則配合空軍強行増援，負隅頑抗、无懈可撃。我則万衆一心，前仆后継，不辞攀躋之艱，不畏壁塁之固，炮火交織于山谷，血肉横飛于林麓。攻戦之苦，犠牲之烈，殆興軍以来所罕有，而攻堅克険，実開抗戦之先河。

不僅足寒敵胆，抑且丕振軍威。翌歳，南寧、欽防之敵，相継奔潰，未当不以斯役為之嚆矢。

唯我報国捐躯之忠勇将士，以死勤事，迄今思之犹有余慟。而其英風浩气，震爍寰区，取義成仁，彪炳簡册，不独本軍与于有栄，亦中華民族之光也。嗚呼！壮志往矣，叢葬山河，戦績長存，永垂不朽！爰聚忠骨，肩隆冢于崑崙関西側之陽，為建塔坊，并樹碑志其姓名，計官兵陣歿者三千四百有奇，藉慰英魂，用彰忠烈。而此記念塔、坊，創建于二十九年之春，中以本軍遠征緬甸，防守昆明，延三十三年五月始告落成。際茲敵寇縦横，山河未復，緬懐壮烈，悲憤曷極！凡我袍澤，尤当瀝后死者之任重道遠，駆寇復仇，以竟遺志。庶抗戦建国大業，早観厥成。則記念崑崙関戦士者，适足以激発忠義，惕励来茲，願不伝欤！至参加斯役之将領，則為第五軍副軍長兼栄一師師長鄭洞国，新二十二師師長邱清泉，二〇〇師師長戴安瀾，一五九師師長官官裨。率領軍補充一、二両団者為二〇〇師副師長彭壁生，運籌帷幄者，為第五軍参謀長黄翔，例得背書。若其詳実戦績，将具于国史，茲不贅述焉。(下線筆者)

中華民国三十三年　　月　　日

碑文はまず、崑崙関の歴史上の重要性について、「昔宋狄武襄，雖于上元夜乗濃智高不備，一挙而攻略之」という宋時代の戦例をあげた。そして、「中華民国二十八年冬，倭寇以第五師団由北海登陸。侵襲桂南。連陥欽防、南寧，其勢甚鋭。」と戦前の情勢を説明、「我前鋒二〇〇師六〇〇団，得予南寧近郊戦闘，血戦三日，殺傷過当，団長邵一之壮烈殉職」と、戦死した団長名をあげ、日中間の「血戦」ぶりを強調した。日本軍の守備について、「其堅固堡塁，側防機関，乃星羅棋布于崇山峻嶺之間，宜其固若金湯」といい、「然竟為我軍所破，誠非倭寇予料所及。」と陸軍第五軍の善戦を絶賛する。戦闘の経過を詳細に説明した後、「敵則配合空軍強行増援，負隅頑抗、无懈可擊。我則万衆一心，前仆后継，不辞攀躋之艱，不畏壁塁之固」と両軍の強さを強調した。戦闘の激しさについて、「炮火交織于山谷，血肉横飛于林麓，攻戦之苦，犧牲之烈，殆興軍以来所罕有，而攻堅克険，実開抗戦之先河。」と表現した。つまり、崑崙関の戦いは、第五軍の歴史、全国抗戦の歴史上において、画期的なことであると高く評価した。その勝利について、「不僅足寒敵胆，抑且丕振軍威。翌歳，南寧、欽防之敵，相継奔潰，未嘗不以斯役為之嚆矢」と南寧の回復などに繋がっていると見た。

最後に、戦死者に対して、「其英風浩气，震爍寰区，取義成仁，彪炳簡册，不独本軍与于有栄，亦中華民族之光也。嗚呼！壮志往矣，叢葬山河，戦績長存，永垂不朽！」と述べ、第五軍の栄光だけではなく、中華民族の英雄として、永遠不滅の功績を残したと、最大級の賛辞を送った。霊園の建設について、「爰聚忠骨，启隆冢于崑崙関西側之陽，為建塔坊，并樹碑志其姓名，計官兵陣歿者三千四百有奇，藉慰英霊，用彰忠烈。而此記念塔、坊，創建于二十九年之春，中以本軍遠征緬甸，防守昆明，延三十三年五月始告落成。」と説明した。つまり、3400名の戦死者のため、墓と記念塔を1940年に建設しはじめ、その後、「遠征緬甸、防守昆明」のため、工事は一時中断し、1944年5月に完成した。

第五軍の墓苑から300メートルのところに、「民国二十九年崑崙関戦役陣亡日本第五師団少将旅団長中村正雄墓」が建てられており、墓碑の下部に「陸軍第五軍軍長杜聿明　題」と落款がある。この碑の建設する経緯は未だに不明であるが、日本側の文献は次のような記載がある。「崑崙関の激戦地には蔣介石総統の題字になる「碧血千秋」の忠魂碑と墓地が造られていた。またこの激戦地に陣没した歩兵第二十一旅団長中村正雄少将の石碑も参道を別にして立派に建立されていた。その石碑に詣でた新田少佐は『かつて南寧駐留の第五師団長今村均将軍が日支両軍の忠魂を祀る忠魂を南寧城外で建てて慰霊祭をやられたが、おそらくは中国側もお礼の気持ちで蔣総統が立てられたものを思う』と回想している[6)]」。

日中戦争中、日本軍は中国側の戦死者のために記念碑を建てたり、祭祀を行ったりすることがよく知られていたが、中国側が日本軍の戦死者のため、お墓と墓碑を作るのは稀なことである。この記念碑を建てる目的、経緯について、更なる調査が必要である。

4．外国関係の記念物

広西は抗戦の重要基地として、中国の同盟国アメリカ、ソ連及び日本反戦組織の活動拠点などの関連遺跡が存在している。

表4 No.1の「在華日本人民反戦同盟西南支部遺跡」は桂林市東郊外の大寺村南にある。元々南岡廟という寺があり、日本反戦運動の指導者鹿地亘が設立した「在華日本人民反戦同盟西南支部」は南岡廟の中に設ける。廟のそばに二本の大樹があり、地元の人の紹介によると、鹿地亘は当時こ

表4　外国関係の記念物

	名称	場所	関連事項
1	在華日本人民反戦同盟西南支部遺跡	桂林市東郊大寺村	遺跡は現在野菜畑となり、石碑などの標記となるものはない。
2	ソ連援華陸軍歩兵中校巴布什金之墓	桂林市西山公園	巴布什金、前ソ連共産党員、陸軍歩兵中校。1939年9月援華第五軍軍事顧問として来華、1940年9月16日に桂林で病気でなくなった。1955年、桂林市人民政府は遺骸を西山公園内に埋葬、桂林市愛国主義教育と革命伝統教育基地。
3	アメリカ飛虎隊桂林秧塘航空基地遺跡(飛虎隊指揮所遺跡)	桂林市臨桂県両江鎮秧塘村	1943年から1945年まで、アメリカの航空援華隊の桂林での活動基地。
4	大韓民国臨時政府駐柳州旧址(「柳州・大韓民国臨時政府抗日闘争活動陳列館」)	柳州市魚峰路	1918年、大韓民国臨時政府は上海で成立、1937年日中全面戦争が始まり、臨時政府は杭州、嘉興、鎮江、長沙、広州などへ移転し、1938年10月-1939年4月に広西柳州で活動した。
5	アメリカ飛虎隊柳州軍用空港遺跡	柳州旧空港	2004年柳州文化財に認定。空港施設以外に、指揮所、防空壕、弾薬倉庫などの関連施設もある。
6	猫児山米軍軍機墜落遺跡	桂林市興安県猫児山黒冲峰	乗員十名、最年長26歳、最年少19歳。

の大樹の下で盟員に講義や講演を行ったという。その樹のうち一本は現存している。

関連する歴史記述については、1938年2月、日本人作家鹿地亘と妻の池田幸子が中国上海に到着、武漢経由で、桂林、重慶に到着、反戦活動を行った。鹿地亘、池田幸子夫婦は周恩来、郭沫若の支持を受け、1939年12月23日桂林で「在華日本人民反戦同盟西南支部」を設立した。支部盟員は坂本秀夫、鮎川誠二、大山邦雄、松山速夫など11人がある。支部代表は権本秀夫である。西南支部が成立後、1939年12月28日に鹿地亘は自ら前線工作隊を率いて、桂南前線に日本軍に対して宣伝活動を行った。29日晩から、崑崙関及び四四一高地において、両軍の陣前100メートルのところで、日本軍に向って宣伝放送を行った。1940年1月下旬、桂南賓陽の戦役中、西南支部の前線工作隊隊員の鮎川誠二、大山邦雄、松山速夫三人は日本軍の空爆を受け、戦死した。

No. 6の猫児山米軍軍機墜落遺跡は桂林市興安県の猫児山黒冲峰にある。1944年8月31日下午4時30分、米軍14空軍連隊375空爆中隊の機号783のB-24型空爆機、柳州基地から離陸、台湾港の日本軍艦に空爆の任務を完遂した後、帰る途中に失踪。そのままで1996年、桂林興安県の二名の

農民に発見された。1996年11月、江沢民主席はマニラでAPEC会議に出席する際、同席のアメリカ大統領クリントンにこれを通報した。そして、米中連合調査隊は4回の調査発掘を経て、兵士の遺骸はアメリカに返還された。これは中国のマスコミに大いに報道され、米中関係の促進にも繋がっていった。

結　び

中国において、「広西の会戦」は「台児荘戦役」、「平型関戦役」のような知名度が高い戦役ではない。そのため、教科書、歴史書などでの紹介は少ない。我々はこうした記念物、遺跡の考察を通して、日中両軍の広西での戦いの様々な実態を知ることができる。もちろん、戦場の真実について、日中双方の資料を照らして検証する必要はあるが、ここに見学しに来た人々は、記念碑、遺蹟に書かれた碑文、説明文などを通して、歴史像を構築し、日中戦争に対する認識を形成するのである。また、こうした記念物、遺跡の存在状況や変遷の解明を通して、近代中国のナショナリズムと戦争の歴史表象との関係の一面を理解することができる。さらに、近年中国においては、戦争記念物、遺跡は「文化遺産」として認知され、その意義、価値を再評価する機運を高まっている。冒頭で引用した『抗戦遺踪——広西抗戦文化遺産図集』の中で、編集者の李建平は、「抗戦文化」という言葉を使って、日中戦争の記念物、遺跡の保存、修復の意義を次のように述べている。

1．抗戦文化遺産は、民族精神の可視的存在である。歴史の時間と空間を保存、展示することを通して、民族精神を具体化することができる。
2．抗戦文化遺産は、愛国主義の教育基地である。祖国が屈辱の歴史から脱出し、独立と自由を求めた歴史的知識の結晶である。
3．抗戦文化遺産は、文化産業の宝庫でもある。観光資源として重要な経済的価値がある。

李氏が提起した「民族精神の可視化」、「愛国主義の教育基地」、「文化産業の宝庫」という三つのポイントは現在中国における戦争記念物、遺跡に対する共通の認識だともいえる。この意味で、「広西の会戦」の記憶へのアプローチは、現在中国に形成しつつある新しいナショナリズムの特徴及び経済発展における「文化遺産」の役割の解明にも繋がっている。

参考文献

南寧市地方史編纂委員会編『南寧市志・文化巻』広西人民出版社　1998年。
桂林史地方志編纂委員会編『桂林市志』中華書局　1997年。
靈山県志編纂委員会『靈山県志』広西人民出版社　2000年12月。
欽州市地方志編纂委員会『欽州市志』広西人民出版社　2000年8月。
荔浦県志編纂委員会『荔浦県志』生活・読書・新知　三聯書店　1996年3月。
宜州市志編纂委員会『宜州市志』広西人民出版社　1998年6月。
李建平主編『抗戦遺踪——広西抗戦文化遺産図集』広西人民出版社　2005年11月。
小田康徳等編著『陸軍墓地がかたる日本の戦争』ミネルヴァ書房　2006年4月。

注

1）広西の会戦について、防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書　一号作戦〈3〉広西の会戦』(朝雲新聞社　昭和四十四年十月）を参照されたい。
2）防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書　一号作戦〈3〉広西の会戦』朝雲新聞社　昭和四十四年十月　699頁。
3）韓晓「関于侵華日軍細菌戦罪行的研究」『常德師範学院学報（社会科学版)』2003年　第28巻　第03期。
4）宜州市志編纂委員会『宜州市志』1998年6月　広西人民出版社　809頁。
5）中国人民抗日戦争記念館　解説文　桂南戦役部分。http://www.77china.org.cn/index.php?id=125
6）防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書　一号作戦〈3〉広西の会戦』朝雲新聞社　昭和四十四年十月　652-653頁。